

『平家物語』と『平治物語』

—— 交渉関係の吟味 ——

日 下 力

諸本研究が大きな進展を見せ、その公刊があいついでいる『保元』『平治』『平家』の三物語にとつて、相互の交渉関係がどのようなものであったかを吟味することは、今日の緊要な課題であると言えよう。周知のように、永仁五年（一二九七）の序文を有する『普通唱導集』には、「琵琶法師、伏惟々々々々勾当、平治・保元・平家之物語、何皆暗而無滞」と記されており、『花園院宸記』元応三年（一三二一）四月十六日条の琵琶聴聞の一節にも、

「平治・平家等、時之語也」とある。十三世紀末期から十四世紀前半にかけて、これら三物語は、明らかに琵琶語りの場を共有していたのであった。複雑な変遷と展開の相を示すこれらの作品に、そのことが投影されなかつたはずはあるまい。各諸本を検討し、作品相互の交渉関係を吟味することは、中世前期に生成した軍記文学の展開を説明する有効な一助となると共に、当然、吟味を廻らせるならば、作品形成期の錯綜した実態に幾ばくかの示唆を与えることにも通ずるのである。

私がかつて、『平治物語』が『平家物語』の影響下に飛躍的な

展開を遂げ、『保元物語』とも相即性を深めていったことを論じ、且つ、現存『平治物語』諸本には、濃淡の差こそあれ、全てに『平家物語』の影響が認められる点を指摘した⁽¹⁾。本稿では、『平家物語』の側に視点を移し、両者の交渉のあり方を考察してみたいと思う。

—

『平家』諸本は、琵琶語りの台本たるいわゆる語り本系と、それ以外の読み本系と通称される諸本とはほぼ二分されるが、それらの諸本を通観する時、『平家物語』の側には、基本的に、対『平治物語』意識の稀薄さが存在していたらしいことを思わせる。『平治』の影響を想像させる記述よりも、それと齟齬する記述が目立つからである。特に後者の諸本にその現象が著しいのであるが、ここではまず、当然『平治物語』との相即性が求められたはずである語り本系の諸本にすら、対『平治』意識の稀薄さを示す事例が含まれていることに注目してみよう。調査した語り本系諸

本は、屋代本(巻四・九欠)・寛一本・平松家本(巻十二欠)・鎌倉本・中院本・百二十句本(斯道文庫本)・八坂本(国民文庫本)の七本である。

語り本系の『平家』は、巻一の最後に安元三年(一一七七)の大火による内裏炎上の記事を載せ、更に過去に遡って、内裏の中心たる大極殿の炎上と新造の先例を記した後、おおよそ次のような一文で末尾を結んでいる。

(大極殿は・筆者注) 後三条院ノ御時、延久四年四月十五日
造出サレテ還幸成シ奉ル。文人詩ヲ作り、伶人楽ヲ奏シケ
リ。今ハ世ノ末ニ成テ、国ノ力モヲトロヘタリケルヤラム、
其後ハ未ツクラレズ。(角川書店刊『屋代本平家物語』p.88)

この文面に従えば、大極殿は延久四年(一一七二)に造出されたものが安元の大火に会い、その後はいまだに造られていないの意になるのであるが、史実に照らしてみる時、ここには、平治の乱で死亡した信西による保元二年(一一五七)の、大極殿を初めとする内裏造営の記事が含まれていてしかるべきであることに気づく。古態を多く存する読み本系の延慶本は、延久の大極殿造出記事に続けて、「此内裏ハ四位少納言入道信西、奉ニ勅宣、国費モ無ク、民ノ煩モ無クシテ、一兩年間ニ造畢シテ、行幸ナシ奉シ内裏也。今ハ世ノ末ニ成テ、国ノ力衰ヘテ、又、造出サム事モ難クヤ有ズラムト歎キアヘリ。」(汲古書院刊『延慶本平家物語』一P.202)と、信西の内裏造営に言及して結んでいる。延慶本は、一旦、大極殿のことに収縮した叙述の筆を、再び内裏全体のことに取り戻し、内裏再建を危ぶむ末代の嘆きをもって巻を終えるの

であり、この形態の方が本来的なものであったと思われる。語り本系諸本は、そこから信西記事を省き、大極殿新造の最後を延久四年という遠い過去に持つていくことによつて、末代意識を殊更にたかめようと思つたのであつたらう。そして、その結果は、『平治物語』との間に一つの齟齬を惹起せしめることとなつている。即ち、『平治』のどの諸本においても、信西紹介の文中に大極殿などの内裏修造のことが筆をつくして記されているのであり、更に、謀叛軍を内裏に攻めた平氏勢も、新造の内裏故に、一時退却の作戦に出て焼亡を回避した由が明確に物語られているからである。『平家』諸本のうち、信西の内裏造営記事を有するものは、延慶本の他には源平闘諍録のみにすぎない。そのほとんどは、平氏の興亡を末代故の異常事として語るために、末代意識を宣揚すべく、『平治物語』の記述を全く無視してしまつたのである。

また、語り本系諸本は、南都へ逃れる以仁王に具奉した三井寺の僧俊秀について、彼の父が平治の乱に「六条河原」で討死した義朝の郎等首藤刑部丞俊通であるとしている(寛一本・日本古典文学大系『平家物語』上p.308。(屋)欠巻。俊通の孫とする本もある)が、これも『平治』諸本では、討死の場所を明記しない古態本系(陽明本・学習院本・松平本)を除き、全て俊通は「三条河原」で討死したことになっている。『平治』の記述は、全諸本とも、六条河原の合戦に敗北して河原を上りに落ちる義朝一行をのばす為めに、俊通は途中から引き返して討死したとするから、「六条河原」の合戦での討死でないことだけは、どの諸本においても確

かである。『平治物語』は、陽明本等の古態本段階から金刀比羅本段階に至る過程で、『平家物語』との相即性を最も強め、人物像の改変まで行なうのであるが、もし、『平家』の側にも同様な姿勢があったならば、いづれかの諸本で、『六条河原』は「三条河原」に改められるべきものであった。同じ記事を含む読み本系諸本でも、長門本の「五条河原」を別に、四部合戦状本・源平盛衰記も共に「六条河原」である。

『平家』世界との相即性をもくろんだ『平治』の金刀比羅本段階諸本との関係に注目すると、伊豆に配流される頼朝の出京の日付を、『平家』の語り本系が全て永暦元年三月二十日(寛上p.353)とする点も問題とならう。前者では三月十五日と記すからである(『公卿補任』文治元年の頼朝の項、『愚管抄』巻五には十一日配流とある)。「平治」の陽明本系と流布本は二十日とするから、それとの矛盾はないが、『平家』と深い関係を有する金刀比羅本段階諸本と異なるということは、やはり留意されなければならぬ。なお、読み本系の長門本も二十日とし、南都本は二十日と十三日という矛盾した日付を別箇に含む(汲古書院刊『南都本平家物語』p.87188)。

語り本系の個々の本についてみれば、中院本と八坂本に、義朝の家人佐々木源三秀義のことを「平治のかっせんに(義朝の)御ともして命をすてたりし人なり」(未刊国文資料刊行会刊『平家物語(中院本)と研究』三p.108。(八)「保元平治両度の合戦に……」)と記すことも、『平治』の陽明本系を除く諸本が、「敵二騎うって手負ければ、あふみをさしておちにけり」(金刀比羅本・日本古典

文学大系「保元物語平治物語」p.238。(陽名前のみあり)とするのと相違する。秀義討死のことは、後述するように延慶本にもある。また、二条堀河における悪源太義平と重盛との戦いに関して、百二十句本が、義平の矢に重盛の馬が射られたとする(汲古書院刊『百二十句本平家物語』p.603)点も、誰の矢かを明記しない陽明本系の『平治』を除く全諸本が、義平に命じられて射た鎌田正清の矢であったとするのと大異する。義平の矢と記す点は、四部本でも同様である。

『平家物語』と『平治物語』とは、前述した如く、琵琶語りにのって一時的にしる同時に語り広められていたものであった。その琵琶語りの台本である語り本系の『平家』にさえ、我々は『平治』と齟齬する記述を見出せるのである。無論、語り本系の中に『平治』の影響を指摘することも可能である。例えば、宗盛が頼政の嫡子仲綱に愛馬の尾髪を切られ、宗盛という焼印まで押されて追い返された時の彼の怒りの表現、「おどりあがりくいかられけれども、南丁が尾がみもおいず、かなやきも又うせざりけり」(寛上p.296。(屋)欠卷。(中)百ナシ。(四)盛を除く読み本系ナシ)は、信頼が経宗惟方に裏切られた時の表現、「踊上くしけれど、いたじぎのひよきたるばかりにて踊出したる事もなし」(陽明本・思文閣刊『陽明叢書・平治物語明德記』p.72。他諸本同類)からヒントを得た可能性があろう。が、何よりも、読み本系と比較した場合に、語り本系にははるかに『平治』との齟齬記事が少ないという事実が、『平治』に対する配慮の存在を示している。とはいえ、やはり、『平治物語』が作品の根幹である登場人物の

性格さえも『平家』と合致するよう改変したのに比べると、その配慮の姿勢に雲泥の差があることは否めない。右にあげた『平治』との齟齬記事は読み本系からも抽出できたが、そのことは、読み本系・語り本系の個々の諸本の先後出問題は別としても、『平家物語』が『平治物語』の存在に強く影響されることなく、自らの世界を継承し続けたことを意味しよう。『保元物語』との関係においても、同様であつたろうと思われる。『平家物語』は、その流動・展開の過程で、他を自己の世界に吸収こそすれ、他の世界への参入を試みることはなかつたと考えられるのである。

二

次に、いわゆる読み本系の諸本に目を転じてみよう。語り本系に比し、この類にはより多くの古態性が残されていると見られるが、中でも、延慶二年（一一三〇九）という現存本最古の書写年代が明らかな延慶本に注目しなければなるまい。近年、横井清氏によつて公表された正元元年（一一二五九）九月以前のものとして認定される「僧深賢書状」には、「平家語物合八帖本六帖 後二帖、猷借候」とあり、すでに著名な『兵範記』の紙背にある仁治元年（一一二四〇）の書状の文面「治承物語六卷号平家」とあわせ考へる時、『平家物語』の形成・成立期は、ほぼ十三世紀中葉と推されてくる。延慶本はそれから約半世紀の間に成立したわけであり、『平家』の古態を知る上での貴重な伝本と言へる。以下の論述では同本を中心に検討していきたいと思う。（なお、永仁五年（一一九七）頃には『保元』『平治』『平家』が琵琶語りに供されていた『普通唱導

集』ことも、顧慮されなければならないだろう。調査した読み本系諸本は、延慶本を筆頭に、源平闘諍録（闘諍録と略称。五冊のみ現存）・四部合戦状本（四部本と略称。巻二・八欠）・長門本・南都本（巻二・三・四・五欠）・南都異本（巻十のみ）・源平盛衰記（盛衰記と略称）の七本である。

ところで、私は『平治物語』諸本と『平家物語』との関係を別稿で吟味した際、その古態本系では『平家』の影響がごくわずかで、物語の根幹にまでは及んでいないことを指摘した。例えば、重盛像などは『平家物語』中の賢人像と相反する如き相貌を具有しているのである。ということは、『平家』の広範な流布以前に、『平治物語』は作品の核となる部分を形づくっていたものと思われ。まず、延慶本の中に、『平治』の影を探ることから始めてみよう。

延慶本には、鹿谷事件で連座した娘婿の成経の助命を強硬に嘆願する教盛の言葉を、清盛に伝える即等季貞の言動に、次のような重複性が見られる。

（教盛……）ト宣へバ、季貞ニガクシキ事哉ト思テ、
此由ヲ委ク入道ニ申ケレバ、物ニ心得ヌ人哉トテ、又返事モ
宣ハズ。季貞申ケルハ、宰相殿（教盛）ハ思食切タル御気色
ニテ渡セ給候メリ、能々御計有ベクヤ候ラント申ケレバ、

（一 p. 275. 長同）

即ち、季貞は④⑤の両度にわたって、清盛に教盛の言葉を伝えていたことになる。⑥で「委ク」申し述べたのであるからには、①の報告は不必要であらう。そこで、『平治物語』の類似した場

面、池禪尼の頼朝助命嘆願を重盛が清盛に伝達する場面からの影響が推測されてくる。『平治』の陽明本系では、一旦嘆願を拒否された池禪尼の恨み言をまじえた再度の要請に、重盛は再び清盛に対して、「池殿のうらみ以外に候。女房のをろかなる心に思たぢぬる事は、難儀極なきならひにて候。……」と語るが、その時の清盛の態度は、「大事被_レ仰人哉とて、事の外にもなかりけり」というふう_レに記されている（学習院本・未刊国文資料刊行会刊『平治物語（九条家本）と研究』P 77。他諸本ナシ）。この一文は、先の延慶本における清盛の態度、「物ニ心得_レ又人哉トテ、又返事モ宜ハズ」と一脈通ずるものを感じさせよう。ひるがえつて、重盛の言も、季貞の「ニガ／＼シキ事哉ト思テ」に通いあう性格を持っている。延慶本の重複性は、『平治物語』陽明本系の頼朝助命話に影響された結果と推察されるのである。

また、義経暗殺の目的で頼朝から派遣された土佐房昌俊を召し寄せる為に、その宿所に向つた弁慶が、座席につく時、心中に「昌俊ハ鎌倉殿ノ侍也、我ハ判官殿ノ侍也」と思い、「昌俊ガ上ニ居カ、リテ」（三P 524）と描かれる箇所も注意を要する。弁慶の思考は、鎌倉殿_{||}頼朝よりも、判官殿_{||}義経の方が位が上であるから、自分は昌俊の上席について当然であるという発想と考えられる。ところが、官位は常に頼朝の方が義経の上であつた。或いは、鎌倉に対する都の優位性を意識した発想かも知れないが、ここはやはり、『平治物語』の光頼参内の場における、光頼が信頼の上座について居かかる情景を、一応、想起すべきであらう。陽明本では「のぶより卿の着たる座上にむすといかゝり給へば」

（P 52）と簡略であるが、金刀比羅本段階諸本では、「あれは右衛門督、我は左衛門督。人は何とも振舞、座席の下には着まじき物を。」とおもはれければ、信頼の上にむす_レと着給ふ。」（金P 210）とあり、弁慶の思考と光頼のそれとに共通性が認められる。別の機会に論証したことであるが、十三世紀後半に成立した公算の大きい『平治物語絵巻』の詞書には、すでに金刀比羅本要素が混入している。そのことを勘案すれば、延慶本中に金刀比羅本段階諸本との類似性が認められたとしても、何ら不自然ではないであらう。弁慶・昌俊対決の場にも、『平治』からの投影が想像されるのである。

右の事項に関連して、重盛の清盛教訓の場と光頼参内の場との関係も問題となる。延慶本では、法皇幽閉を思い_つつた清盛を戒めるために清盛邸に参じた重盛が、「弟の右大将宗盛卿ヨリ上ナル一座ニムズトツカレタリ」（一P 286）と表現されており、これは先の光頼の行動を連想させる。殊に「ムズト」という言葉の一致が、その連想を導く。更に、父教訓の後、重盛が弟の宗盛らに向つて、「イカニ御用イナクトモ、叶ザランマデモ、各ノ、加様ノ事ヲバ可_レ被_レ申ニテコソ候ニ……」_といさめ、宗盛が「赤面シテ、スクミ返テ汗水ニナラレケリ。事ノ外ニワロクゾ被_レ見ケル」と記されている点（P 298。この一条は他本に全くない）、光頼が信頼をはずかした後、弟の惟方に対して行なつた諫言の中に、「こはいかに。てんきなればとて、存するむねはいかでか一儀申さざるべき」（陽P 56）_というくだりが陽明本にあり、惟方が「せきめんせられ」た由も見えることと照応しよう。その他、

清盛も信頼も「伏目」になつたことが描かれている点、重盛・光頼が末代に生を受けたことを嘆いている点、中国の許由説話を持ち出している点等、両者には相通する面がある。弁慶・昌俊対決の場が『平治』の光頼参内（参内）に示唆を受けたものとする、この重盛教訓の条もその可能性を否定できまい。

前引した延慶本・卷二末尾の信西内裏造宮記事には、「国費モ無ク、民ノ煩モ無クシテ」の一文があつた。これは、『平治』の陽明本で信西の内裏造宮を述べた中に、「たみのついでもなく、くにのわづらひもなかりけり」(p.9)とあるのと類似しており、或いはその系譜をひいているかと推量される。

文面の類似をあげるならば、平治の乱で縛につき、鹿谷事件で再び捕えられた成親を非難する清盛の言が重要である。彼は平治に捕縛された時の成親を回想して、「(貴殿は)越後中将トテ、嶋摺ノ直垂・小袴キテ、折烏帽子引立テ、六波羅ノ馬屋ノ前ニ引スヘラレテオワセシカバ、」(一p.246。(長同類))と云うが、『平治物語』の陽明本系は、その時の成親の有様を、「しませりのひたゝれに、おりゑほしひたてゝ、六はらのみまやのまへにひきすゑられてぞむたりける」(陽p.137)と記している。この文面の一致度は、両者の間の何らかの関係を予測させるが、ここでは共通の資料・伝承に基づく記事の一致という場合を考慮に入れて、『平治』古態本系から『平家』への影響関係を暗示する微証としてあげておこうと思ふ。

このように、延慶本の幾つかの記述の裏側には『平治物語』の影を透視しうるが、そのことは、少なくとも『平家物語』の広範

な流布以前に『平治物語』の核となる部分は形成されていたとする前述の想定を、『平家』の側から支持する働きをしよう。しかし、『平治』の影響を探る作業には少なからぬ困難を伴つた。次に、他の読み本系諸本について若干触れておこうと思ふ。

伊豆配流になる頼朝の出京の日時を、『平治』では永暦元年三月二十日または十五日とすることは前章で述べたが、關靜録の中には、戦乱の二日後に当る平治元年十二月二十八日とする記述がある(未刊国文資料刊行会刊『源平關靜録と研究』p.25)。実は、この十二月二十八日とは、『平治物語』によれば、都落ちした義朝一行から頼朝が雪中落伍した日であつた。多分、關靜録作者は、頼朝の雪中落伍話にまどわされて、誤りを犯してしまつたのであろう。

南都本にも同じような例を見出せる。頼朝を捕縛した弥平兵衛宗清が、頼朝流罪の際に篠原の宿まで見送つた話は著名であるが、『平家』諸本中南都本のみは、鏡の宿までと記している(p.99)。一方、『平治』陽明本系では宗清見送りの条はなく、その代り、頼朝の将来を夢合せする頼頼源五盛康が鏡まで見送つたことになつており(学p.93。他諸本では、盛康は瀬田、宗清は篠原までとする)、これも、盛康の鏡見送り話を宗清と誤つたものだらう。

他の諸本に比し、盛衰記では『平治』の影響をかなり明瞭に指摘できるものがある。伊豆にある頼朝が同じく伊豆に流された文覚のことを聞き、「胡馬北風に嘶へ、越鳥南枝に巢くふ習にて、都の人の床しさに」面会を思い立つ(国民文庫刊行会刊『源平盛衰記』p.467)という叙述は、『平治』の頼朝流罪の際の叙述、「胡

馬北風に嘶、越鳥南枝に巢をかくる、蕃類の無心だにも故郷は忍ぶ心あり」(学P 91。『文選』による。他諸本同類)から来たものと思われ、すぐ近接した部分にも、その関係をほのめかすものがある。それは、頼朝が謀叛をすすめる文覚に対して池禪尼から与えられた忠告を語る部分で、「狩・漁すべからず……経よみ仏を唱へて」(P 470)という池禪尼の言葉が、『平治』陽明本系の「狩・漁捕のあそび、又思よるまじき也」(学89)、「経よみ、念仏をも申して」(同P 90)というそれに通ずるのである。

朝敵捕の部分では、上代から信頼に至る朝敵を並べた後、「是皆……朝威を背き、野心を挟し輩也」(P 422)の一句を置くが、これはおそらく、信頼を暗に批判した『平治』の序の一節、「人おごつててういをいるがせにし、たみはたけくしてやしんをさしはさむ」(陽P 3。他諸本同類)と関連がある。

この他、金刀比羅本段階以降の『平治』の影響とおぼしきものに、法皇の御所で狼籍に及んだ文覚を描いた表現「護法の付たる者の様に躍上躍上して」(P 444)と、「平治」で信頼が経宗らに裏切られた時の表現「護法などの付たるやうに、をどり上り／＼忿られけれ共」(金P 217。陽「護法……」ナシ)の類似(盛では他に、清盛が激怒した時の表現として、躍り上り／＼することを三箇所に使用。P 121 421 577)、また、嗣信最期の場面で、類死の嗣信に対する義経の叱咤の言葉「猛兵の、矢一中て生ながら不_た言事やはある、左程の後れたる者とは不_た存者を。」(P 1095)と、落馬しようとする重傷の首藤俊綱をいさめる父俊通の言葉「矢一にあたりて馬よりおつる者やある。不_た覚なり。」(金P 234)の類似、等がある。

(11)

盛衰記におけるこうした現象は、読み本系の最後出本とされていくことと関わるものであるかも知れない。しかし、盛衰記も含めて読み本系諸本には、『平治物語』と組簡する記事が多く存するのであり、むしろ、その事実の方が重視される。次章では、延慶本を中心に対『平治』組簡記事を検討したい。

三

延慶本等に見られる対『平治』組簡記事は、大多数が『平治物語』に採取されなかった平治の乱に関する異伝を記したものと考えられる。そこに、『平家物語』の形成基盤となった伝承世界の広がり想像する必要がある。と同時に、『平家』は、その形成当初から、平治の乱に言及する時、必ずしも『平治物語』になづく現存本の如き形態の『平治物語』を、第一資料とはしていなかったらしいことを臆測させる。ともあれ、古態本系の『平治』との組簡を主に、その一々について検証を進めよう。

(一) 平治の合戦に熊手を背後からかけられた平頼盛は、名刀抜丸を以てそれを切りすてて逃げのびたというが、その熊手をかけた人物を、『平治』では鎌田正清の下人、延慶本では鎌田自身とし、切りすてた熊手の部分も、前者は柄、後者は鎖と、両者で相違する(陽P 93、全諸本同。延二P 569。盛人物名不明、切った部分鎖金)。但し、両者間には、「抜丸なかりせば、よりもり、命延がたし」(陽P 100)、「此、大刀ナカリセバ、今マデナガラヘム事カナフマジ」(延同前)といった類似の発想も認められ、巷間

に広まっていた頼盛の武勇譚を、両者が別個に取り込んだ蓋然性が高いと思われる。

(二) その抜丸の伝承について、『平治』は、頼盛の父忠盛が邸宅池殿で昼寝をしていた時、立てかけてあった抜丸が自然にぬけて、池より現われた大蛇を退けたとするのに対し、延慶本は、祖父正盛の時のこととして、池の大蛇ではなく「小キトカゲ」が這いよったとする。また、前者では忠盛自身が突見した話にしているが、後者では「余所ニテ人ノミケ」の話と記す(陽P100、全諸本同。延二P68。(盛)『平治』に類似)。これなどは、明らかに『平治』にとられたものとは異なる伝承を、『平家』が記載した例であらう。

(三) 流罪にされた惟方の配流地を、『平治』は長門国、延慶本は土佐国とする(学P68、全諸本同。延一P67。史実は長門国)。この場合は、延慶本の単純な誤認・誤写とも解される。

(四) 頼朝捕縛の地を、『平治』では不破の関を越えた関ヶ原(陽P177)、または青墓(他諸本(金)P272)として、いづれも美濃国内であるが、延慶本では近江国とする(一P918。(盛同))。延慶本の同箇所には、更に、清盛の面前に連れて来られた頼朝が「カネ付タル小冠者」であったこと、乱の因を問う清盛の尋問に「其事ノ起リ、ツヤ／＼不レ知」と答えたことなど、『平治』にはない内容が含まれており(盛同)、捕縛地が違うのも異伝に基づく故と思われる。

(五) 悪源太義平の首を刎ねた難波三郎経房が雷となった悪源太に蹴殺される話は、『平治』でよく知られているが、延慶本では

一の谷の平氏軍中に彼の名前を見出せる(学P95、全諸本同。延三P76。(長)盛同)。詳しくは別稿にゆづるが、経房雷死の話が、『平家』の形成時点でいまだ一般化していなかった一証と考えられる。

(六) 『平治』の陽明本系には、義経奥州下り以降の、いわゆる源家後日譚が含まれている(流布本にもあるが、同本の成立が文安三年(一四四六)以後と推されるので、比較の対象外)。その中で、義経の下向年時を承安四年と記すのに対し、延慶本では承安元年説と四年説とが併存する(学P98。延二P191370。(長同))。また、四部本は元年説(大安刊『四部合戦状本平家物語』上P203243)であり、『平治』の金刀比羅本段階の一本で短い後日譚を記す京函本も同説である。義経下向年時については両説が伝承されていたものと推され、『平家』生成期には固定していなかったのであらう。

(七) 同じく後日譚中には、頼朝挙兵の際に平家から刺客を向けられて自害した頼朝の弟希義の話があるが、延慶本では彼は殺害されたこととなっており、刺客の名も「蓮池次郎権守家光」に対して「蓮池次郎清経」、希義の異名も「けらの冠者」に対して「福田冠者」と異なる(学P10394。延二P218。(長同))。四「介良冠者」のみ『平治』と一致。これも異伝を記したものであろう。

(八) 富士川合戦の時に義経が頼朝の陣に馳せ参じた場所を、『平治』後日譚は頼朝が富士川に向う途次の相模国大庭野とし、延慶本は合戦直前の駿河国富士川とする(学P103。(延二P190。(長同))。また、闘諍録(P119)盛衰記(P562)は、合戦後の浮島ヶ原

でとし、四部本(上P 202)も合戦後のこととしており、義経・頼朝再会話が様々な形で伝承されていることを示している。

(ハ) 行家と共に平家と戦った墨俣合戦で討死した円濟(義円)

について、『平治』後日譚は、戦わずして命の失することを恐れ、延慶本は、行家と先陣を争う気持からただ一騎で夜の敵陣に潜入し、発見されて討死したとする(学)P 105。(延)二P 383、なお、名前を円全とす。(四長盛同)。また、南都本は行家・円濟が策略によって夜襲を敢行し、円濟のみが討死したと記す(P 315)。この場合も異伝の記載であらう。

(四) この他、語り本系のところでは触れた佐々木源三秀義について、『平治』陽明本系は単に名前のみを出し、金刀比羅本等は義朝の都落ちを助ける為に奮戦した後、近江へ逃げのびたとするのに対して、延慶本は、兄弟五騎と共に主君の後を追って落ちようとしたものの、敵をあざむく為に栗田口まで引返し、そこで討死したと語る(陽)P 113。(金)P 238。(延)三P 14)。但し、延慶本の別箇所では頼朝旗上げの時にも生きていたことになっており(二P 92。『吾妻鏡』も同様。同書によれば元暦元年八月に討死)、両方の伝承があったものと推される。

如上、延慶本を中心に他の諸本に適宜言及して、対『平治』齟齬記事を見つけたのであるが、右にもれた主要なものを、他の読み本系諸本から拾っておこう。

四部本では、悪源太と鎌田に窮地に追い込まれた重盛を助け、自らが、犠牲となった与三左衛門景泰について、悪源太に「被

射」(下P 117)で死亡したとあるが、『平治』諸本は太刀にて討れた由を記している。もっとも、これは「討」を「射」と誤写したのかも知れない(17)。(なお、重盛の馬を射た人物が(四)と(金)等で矛盾することは前述した)。

長門本には、清盛が頼朝を流罪に有免する時、頼盛の子として許した条が見える(国書刊行会刊『平家物語長門本』P 309)が、これは『平治』に全く見られない。頼盛の母池禪尼が頼朝の助命に尽力したところから派生した伝承であつたらうかと思われる。

盛衰記の場合は、『平治』の影響を想像させるものが少なからずあったが、逆に他本にない齟齬記事も認められる。『平治物語』で活躍する平家の郎等家員が、盛衰記では「平治元年の比」に日向太郎通良追討のために九州へ下向、翌「永暦元年四月」に通良追討の報をもたらしたとあつて(P 28。史実は不明)、平治の乱が起つた平治元年十二月九日から二十六日にかけては都にいなかったらしい記述となっている。また、義経の生涯をまとめて記す所(P 115~118)では、義経と頼朝の再会は、義経が上野国の伊勢三郎義盛の許から鎌倉に向いて果されたとするなど、前記(ハ)の項を見れば明らかのように、『平治』は言うまでもなく、盛衰記内部ですら矛盾をきたしている。義経に関する全く別箇の伝承を載せたと考える以外にない。盛衰記は『平治』の影響をかなり明瞭に見せながら、齟齬記事をも温存し(一)(四)(ハ)(九)の項参照)、新たにそれを増加させてもいるのである。

このように、我々は『平家物語』のあらゆる読み本系諸本にかなりの対『平治』齟齬記事を発見できる。そのほとんどは、『平

治物語』で形象化されたものとは異なる逸話・伝承の類を取り入れたものと考えられ、『平家』の形成がいかに広い伝承世界を踏まえたものであったかを教えてくれる。殊に、後出性を云々される盛衰記においてすら、『平治』と矛盾する新たな伝承が見えていることは、『平家』と伝承世界との関わりの根の深さを思わせる。語り本系に指摘できた対『平治』意識の稀薄さは、読み本系において一層鮮明である。そして、このことは、結果的に、『平治物語』の流布、或いは生成に関する一つの示唆を与えるであろう。つまり、『平家』の広範な流布以前に作品の核となる部分を形づくっていたと思われる『平治物語』は、しかし、『平家物語』の形成期には、なお十分に流布していなかったのではあるまいかという示唆である。

現存本最古の書写年代を確認できる延慶本に、再度、注目してみよう。同本に『平治』の投影を探る作業は、対『平治』齟齬記事を検出する作業より困難をきわめた。しかも、最初にあげた成経助命話における季貞の重複性は、それが不自然な重複叙述であるが故に、元来存在したものとは考え難い。とすれば、延慶本から遡って『平家』形成期より保持していたと考えてよい、『平治』投影記事は、更に徴々たるものとなってしまふのである。他方、対『平治』齟齬記事は、『平家』形成期より温存されていた公算が大きい。他の諸本からも検出できることや、後出本における温存の例が、そうした推測を助けてくれる。

齟齬記事のうちで特に瞩目されるのは、(六)から(九)までが『平治』の後日譚部に当るということである。後日譚部が『平家』に

影響を与えた形跡は全くないと言ってよい。義経の奥州下り以降の話は、『平家』形成の時点ではいまだ固定化していなかったと考えるのが妥当であろう。『平治』の後日譚部は、『平家』の形づくられる時点で相接して、またはそれ以後に増補された蓋然性が高いと思われるのである。(五)の、雷となった悪源太に難波経房が蹴殺される話は、別稿で詳論する予定であるが、これも『平家物語』以後の作出と推定され、後日譚部の『平家』以後増補説はそれによっても支持されることなるろう。右に関連して、『平治』の古態本系に『平家』の影響がすでに認められる事実も、想起されるべきである。究極のところ、『平家物語』が持続しつづけた対『平治物語』意識の稀薄さや齟齬記事の多さは、その淵源をたどれば、『平家』形成期に『平治物語』が現存本の如き形態を完成させておらず、流布の状況も限られたものであったという点に帰着するものと考えられるのである。

四

『平家物語』と『平治物語』との交渉関係の吟味は、『平治物語』の展開にとって『平家物語』の存在が不可欠であったのとは対照的に、『平治物語』が『平家物語』の形成や展開に強い影響を及ぼし得なかったことを立証できたものと思う。『保元物語』と『平家物語』との関係も、また同様であったに相違ない。『平家物語』は他に屹立して個有的な世界を形象化し、保有しつづけたのである。

しかし、如上の吟味を通してより興味深いことは、現存『平治物語』の完成が、『平家物語』の形成または成立を待ってなされ

たらしいことを推測させる点である。そのことは、『平治物語』の悪源太雷化話をとりあげる別稿で再論したいと思うが、『平治物語』が、『平家物語』更には『保元物語』との複雑なからみあいの中から、現在の形態を完成させたという点だけは間違いないものと考えられる。今日、漠然と一般化されているかに思われる、『平家物語』の成立以前に『平治物語』が完成されていたという認識は、現存『平治物語』を対象とする限り、改めて問い直されなければならないだろう。

注(1)・(4)・(7) 「平治物語の古態本について——高阪説・笠説をめぐる疑問——」(『古典遺産21』昭45・12) 『平治物語』の達成・その一——『保元物語』の展開と『平治物語』(『岩手大学教育学部年報34』昭49・12)

(2) 安部元雄氏「四部合戦本『平家物語』にみられる『保元物語』と『平治物語』関係記事について」(『軍記と語り物8』昭46・3) では、四部本中の保元平治関係記事の抽出作業が行なわれている。

(3) 『平治』の古態本系諸本は、陽明本の上中巻、学習院本・松本平の中下巻しか現存しないため、本稿では、上中巻は陽明本、下巻は学習院本を使用した。

(5) 永積安明氏が日本古典文学大系『保元物語平治物語』の解説で十一類に分類された諸本のうち、第三類から第八類までを金刀比羅本段階諸本と考える。

(6) 『平家物語』成立過程の一考察——八帖本の存在を示す

一史料——」(『文学』昭49・12)

(8) 久保田淳氏は『平治物語』の世界——その人物造型を中心として」(『解釈と鑑賞別冊・講座日本文学・平家物語上』昭53・3) で、陽明本系にも重成・家貞・重盛の活躍が見られることに注目して、『保元』『平家』からの投影を想像されているが、軍記物語の形成母胎となった複雑な伝承世界の広がりや重層性を考える時、他作品との関係を探ることに性急であることは危険かと思われる。

(9) 『日本絵巻大成・平治物語絵詞』(中央公論社刊・昭52)の解説。なお、共同執筆された松原茂氏は、詞書の筆跡を弘誓院教家(一一九五—一二五五)の晩年の書風と認定し、絵巻の成立を十三世紀中期としておられるが、その論証過程には疑問が残る。

(10) 赤松俊秀氏は「延慶本平家物語について(上)」(『日本歴史』昭44・10) で、延慶本が『平治』を参照した一証としてこの部分を紹介されている。但し、比較対照させた『平治』本文は金刀比羅本であり、陽明本系本文の方が延慶本には近い。

(11) この他、畠山が巴に組もうとした時に「木曾、巴に組せじと寛阻々々て、二廻三廻が程、廻ける処に」(p.870)と描くところは、『平治』の金刀比羅本等にある、悪源太が重盛に組もうとして、平家の武士に隔てられながら左近の桜と右近の橋を「五廻六廻……」した場面からの影響であるかも知れない。また、横笛が滝口を探す場面で、「人を咎むる里の犬、声澄程に成てこそ法輪寺には入にけれ」

(P 987) とある一文は、金刀比羅本等における常盤都落ちの「節一人をとがむる里の犬、声すむ程に夜はなりぬ」と近似する。但し、これは当時の歌謡などにおける慣用句であった可能性がある。盛衰記には、なお『平治』の影響かと思われるものがある。

(12) 盛衰記には、周知のように「保元平治の日記」なる名称が清盛の言中にある (P 357)。清盛が保元平治の乱に為義・義朝を誅戮した由を語った後に「保元平治の日記と申物に見えて侍り」と記されているのであるが、その後につけて語られる頼朝捕縛の一件は、『平治』の記述と一致しない (第三章四)。右の一文を除けば、ほぼ延慶本の文面と合致しており、これは後の捜入かと思われる。「保元平治の日記」が今日の『保元』『平治』を意味するか否かは即断しかねる。

(13) 釜田喜三郎氏「流布本保元平治物語の成立」(『語文』昭27・11) 以下の諸論文。

(14) 四部本(上)二四三頁の養和元年の記事中では、秀衡が義経を「安元年中」より「十余ヶ年」養育したとあるが、養和元年は安元元年から数えても六年後にしかならず、「安元年中」は「承安元年中」の誤りであろう。

(15) 四部本(上)二六一頁では、行家が千余騎のうち二百余騎を率いて夜襲し敗北したとあるが、何故二百余騎を分けて夜討を敢行したか不明瞭である。これは延慶本等に記す如く、敵陣に潜入した円濟(四は卿房義慶とす)を救うため

に行家が手勢を分けて夜襲したとあったものを、四部本が円濟潜入の部分脱落させてしまった結果と考えられる。

(16) 『平治』の京図本・流布本の後日譚部では、円濟が深入りして討死したのみ記されており、これは『平家』の語り本系と一致する。『平家』の影響下に『平治』の側で改変したのである。

(17) 山下宏明氏は『平家物語研究序説』(明治書院刊・昭47・P 53)で、この部分は四部本が『平治』の陽明本系に基づいて記したものと推されているが、『平家』における異伝記載の例を勘案し、速断は避けるべきものと思う。

(18) 長門本には、鹿谷事件で平家に寝返った多田藏人行綱の行為を評して、「空行鳥をも取つべし、海底の魚をも釣つべし、唯はかりがたきは人の心のうち也」(P 81) という一文がある。これは、『平治』金刀比羅本等における、経宗らの裏切りを評した「雲上に飛鳥は高けれ共射つべし、海底にすむ魚は深けれ共釣すべし、枕をならべても只謀がたきは人の心也」(金P 216) に近似する。直接交渉関係が予測されもするが、当時の慣用句であった可能性も大きい。

(19) 盛衰記には、信西が後白河院の山門参詣のおり、衆徒の知らなかつた前唐院の重宝のことを悉く言い当てた話があり (P 831)、『平治』の陽明本系と半井本を除く諸本に有する同様な記事との関係が注目されるが、内容からみて『古事談』(一)・『雑談集』(八)にある話の系譜をひくと考えられる(但し、後白河院は鳥羽院とあるべきところ)。